

司馬江漢しはこうかん

記 澤 正明

司馬江漢は、江戸時代後期に活躍した洋風画家です。若年から狩野派の絵を学び、浮世絵を描き有名でした。蘭学を学び、銅版画を創製し、油絵を描き、天文学・地理学にも造詣が深く、多方面に才能を発揮した人物です。

江漢は安藤氏の子として延享四年（一七四七）江戸で生まれました。名

は吉次郎といい、後に姓を唐風に改め司馬、名を峻といたしました。江漢はその号です。

江漢は天明八年（一七八八）西洋画の研究のために長崎に旅し、その時の一年にわたる旅日記が有名な『江漢西遊日記』です。当時の風俗などを克明に書き留め、貴重な記録となっておりま。長崎ではオランダ渡りの珍品を見たり、江戸会所の商人「江助」に扮して出島にも入ったりしました。長崎を発ち、時津から舟で、平戸に向かつております。天明八年十一月十六日のことです。

針尾瀬戸の急流の様子を

「山両方より入り込み、その間僅かに流れて波なく、潮雲珠巻、木目の如し。或岩石に触れ、白波飛んで沸湯の如し。



司馬江漢も立ち寄った「小鯛が浦」。急流の針尾瀬戸を通る舟は、潮のたるみを待つのが常だった。

引き潮に渦へ乗り入れる時は、舟忽巻ふなまき込と云。それ故潮の満ちたる時渡るなり。」と記しております。

小鯛が浦で舟よりあがって付近を散策しております。この辺の様子を

「家々には橙を植えて酢として使い、ザボンを辻々に売っている」と記しておりますが、今日もザボンは針尾島の

特産物です。また、

「婦人は生涯眉をそらず、手の指に金輪をはめている。米・麦を食わず。琉球芋を蒸してカゴに入れ、そのみを食す」と観察しております。

風待ちをし、午前二時に出発。

「満月浪を照らし、寒風肌をとぶす。東風吹ひて舟走ることはやし。牛ガ首など云嶋を見る。それより九十九嶋の外海を乗り行り。誠に西は朝鮮・唐の大洋なり。風追いてにて忽ち夜明けて四時（午前十時）過に平戸嶋に着岸す」とあり、八時間の舟行でした。

平戸では時の藩主「松浦静山公」に招かれて、紅毛書物を拝見し、江漢は画を認めております。

「薄茶は殿様自身が茶室で下された」とあり、欲待ぶりが窺われます。

その後、生月に渡り一ヶ月余り滞在中にしており、当時盛んであった捕鯨の様子を詳しく書き残しております。